

JUDI 通信

2018年春号 (No.7)

発行元：都市環境デザイン会議国際委員会
〒114-0012 東京都北区田端新町 3-14-6 ノザキGビル
HP: <http://hattorikeiro.wixsite.com/judi-international>
発行日：2018年3月30日

都市をデザインする

川上光彦：1947年生れ。京都大学で建築と都市計画を学ぶ。金沢大学で都市計画を担当するとともに、金沢市などの都市づくりに関わる。現在、石川県都市計画審議会会長、NPO法人金澤町家研究会理事長などを務める



地方都市の都市づくりに関わってきた立場から、都市をデザインしてきた経験の一端を披露してみたい。

私自身は、大学で建築と都市計画を学び、ヨーロッパの都市にあこがれ、1970年代のイギリスなどのニュータウンや住宅団地の計画理念と実際の風景にふれ、それらが既存の都市を継承して形成されていることを実感した。F.Gibberdによる“Town Design”がヨーロッパ諸都市の都市空間を解析しており、それらを現地を確認して回った。そうした中で、印象的だったのは、ドイツのシュツットガルトにおいて、郊外団地の開発が軌道系交通システムと一体的に整備されていたことであった。そうした計画性は、1990年代からの各都市のLRT整備においても同様にみられる。

翻って、この間のわが国の都市づくりをみると、都市の人口増加および自動車の普及に対応するために郊外開発と道路整備に追われてきており、対照的である。実現は、土地区画整理事業による面的で同心円的な

「コンパクトシティ」の本を編集されたマイク・ジェンクスと会うために、日本で「コンパクトシティ」を著した海道先生とイギリスのファルマースにある彼の自宅を訪れました。ファルマースは人口2万5000人の小都市ですが、中心市街地には多くの個店が立地しており、地域経済がしっかりと回っていることがすぐ分かりました。いわゆる中心街であるハイ・ストリートは自動車は通行禁止で、夕方の4時から朝の11時まで荷下ろしのための車輛は通行できるようになっていました。さらに、印象に残ったのは、道路の狭さです。目視で

拡大およびそれと一体となった放射環状型の幹線道路体系の整備によって遂行されている。それらが都市にもたらしたのは、中心市街地の商業機能等の衰退、公共交通の脆弱化である。

この間に導入された線引き制度は、市街地の無秩序な拡大を抑制するのに一定の役割を果たしたが、計画的な都市づくりにまでは至らなかった。近年進められている立地適正化計画は、かなり出遅れた感はあるものの、交通システムと連動した都市づくりへと向かう方向性を見出せるものである。

また、当然ながら、都市づくりは単一的な計画や事業で行えるものではない。いくつもの継続的で息の長い取組みが必要である。さて、それを誰が、どのような組織が担うのが課題である。とくに地方都市の場合は、自治体スタッフも地元の専門家も少ない。金沢市は、そのような状況を克服するため、1991年より大学の専門家を都市づくりの各種施策の検討段階に参加させる「まちづくり専門員」を導入し、私もそ

すが、歩道を含めて8メートルぐらいしかありません。つまり、ハイ・ストリートはまさに人間のための空間となっており、自動車は仕方ないから通してやるか、といった二番手の位置づけがされています。人によって賑わいのある空間をつくろうと思ったら、当たり前ですが人（歩行者）と相性の悪い自動車には遠慮してもらわなくてはなりません。この欧州では当たり前ですが、日本ではなぜ当たり前なのか。自動車のための道路をつくると同時に賑わいのある空間ができる訳がないとことを再確認しました。（龍谷大学教授 服部圭郎）

の一人として参加してきた。これまで30年近く務めてきており、結果的として継続的に関わってきたことになる。近年、各都市で進められているインハウススーパーバイザー（ISV）のさきがけかも知れない。

ただし、都市づくりへの関与は闘いの連続でもある。大は市街地再開発事業、小はマンホールの蓋への目立つデザインなど、反対や火消しに奮闘せざるを得ない場合が少なくない。大学教員に実際の権限は無いものの、関与する機会があれば機能することがある。私の経験からみて、提案した方向へ進んだものがある一方、闘ったまたは関与する機会が得られず敗れた（？）ことも少なくない。

さて、わが国では、都市計画の市町村への権限委譲が進み、首長を中心とする意欲と工夫があれば、かなりの都市づくりが行えるようになってきている。それを駆使して努力するかどうかが都市づくりの成果が大きく異なってくる。都市の特性に対応した施策の検討、必要な自主条例の作成、そうしたことを担える人材の育成など、各種の取組みが必要である。それらの多くは財源の多寡ではなく取り組めるものだろう。

もちろん、そうしたことを行える体制を整え鼓舞する首長のリーダーシップは欠かせない。ただし、それらを中央省庁に頼るのは慎重であるべきだ。国には自治体と異なる利害や論理がある。あくまで、地方の論理とまちづくりを担える人材育成にこだわるべきである。



ファルマースの街並みは、自動車が普及した現在でもヒューマン・スケールの空間が維持されている。さすがにコンパクトシティの著者が、終生の地として選んだ街だけである。

四季雑感





2012年に保存修復が完成した「いなえ」。看板建築を解体するなどして、奥行きのある街並みを生みだした(左)。改築前(中央)と改築後(右)。

佐原は、江戸の水運の拠点として栄えた商家町である。1996年、関東では初めて重要伝統的建造物群保存地区に指定された。その歴史的町並み再生に私達が関わって20年以上が過ぎた。手掛けた建物は16棟を数え、現在も1件が進行中である。初めて訪れた時、町はさびれて魅力が半減していたが、最近は少しずつ活気を取り戻し、観光客も増えて来た。ありがたいことに2015年には、私達の一連の設計活動に対して建築学会賞(業績)をいただいた。

重伝建地区で町並み再生の仕事をしていると、よく誤解される。昔どおりに建物を修復する仕事ですね。いや、そうではなくて、と話し始めると話が長くなることが多い。いい機会なので、この場で少しばかりの説明をしたいと思う。通常、重伝建地区の修景では、古写真を元にして建物を復元することが原則だ。でも、そこで疑問が残る。町は生き物のように時代とともに変化するものなのに、どうしてその古写真が撮られた時間に戻さなければならないのか。伝統的な建物の形には、土地の風土や文化が反映されてその形になった理由があるはずだ

が、それが何らかの理由で時代の生活にそぐわなくなった結果に改装を重ねられているのだから、その経緯も考えずに建物を元の形に戻すことが本当に良いことなのだろうか。

そこで、私達は、その疑問に対して、設計者の仕事は建物を昔の形に戻すことではなく、その地域の伝統的なボキャブラリーを使いながら、建築の形と現状の様々な関係性の齟齬を修復し、現代に合わせて再構築することだと位置付けた。そのため、佐原の伝統的な建物の形の意味や機能を理解し、その変遷を調べた。そして、それぞれのプロジェクトに応じて、道路と建物、外部と内部、公と私、記憶と現在などの関係性の齟齬を修復し、空間を再構築した。伝統の形を現代の材料で再現したり、機能を読み替えて新しい関係性を持ち込んだりすることで、建築を再び「働かせる」ことを試みた。そうすれば、町並み修景が形骸化したものにならないのではないかと考えた。

私たちが注目した関係は、必ずしも機能的なものだけではない。例えば、町並みから軒下空間がなくなり、建物の透明性や奥行きのある空

間が失われていた。格子越しに垣間見える風景に心がわくわくするような、通行人と建物の関係を修復したいと思った。また、歴史と現在の関係にも注目した。古いものの持つ美しさを再発見するしかけをデザインする。新しく作った部分に古色仕上げをしない。歴史的建物を楽しむためには、記憶の時間と現在との緊張感を持ち、対話が生まれるデザインが必要だ。記憶や未来に心を馳せ、歴史を楽しんで欲しいと思った。結果、私たちの仕事は建物の修復設計にとどまらず、改装、減築、増築、新築や造園設計、様々な形をとることとなった。

昨年暮に「夢見る力」という本を出版した。建築、アート、舞台美術、様々な視点から、人の心に働きかけ、想像力を誘発するデザインについて書いた。その最終章に「伝統的建造物の再生と新たな価値の創造」と題して、佐原プロジェクトの設計プロセスについても詳しく触れている。機会があれば、ぜひ、お目通しいたきたい。

(文・写真：郡裕美。スタジオ宙一級建築士事務所 主宰、大阪工業大学 教授)

■ JUDI メンバーの紹介 ■

現在、関東ブロックに所属しておりますが、沖縄出身です。父親は那覇で設備設計事務所を営んでおり、実家は大江宏に師事した親戚が設計、建築には慣れ親しんでおりました。東京のデザイン学校を出た母親の勧めで上京しました。大学は初田亨研究室で都市史、大学院は片山和俊研究室で街づくりを学びました。また、伊藤ていじ研究室OBの誘いで、徳島県脇町、岡山県西大寺市の街並み調査に参加し、地域の魅力にはまりました。

ただ、故郷沖縄のことが足元にあったことや、科研参加の機会もあり、博士課程まで進み、沖縄の集落と祭祀空間の研究に没頭しました。そ

金城正紀

きんじょうまさのり
社会環境設計室 代表



ここで、科研に参加していた琉球ブロックの前原信達さん、その後、沖縄の設計事務所を通して石嶺一さんと出会い、JUDIはどこか近い存在でした。

最近では沖縄返還基地跡地、東総駅、南富山駅周辺、伊香保温泉街、津島市天王通りを対象としたコンペに入賞し、提案を通して地域の魅力にはまっております。JUDIの引力は、異

なるブロックがシンクロしていることだと感じます。しばらくは琉球ブロックと関東ブロックの掛け持ちで活動させていただけることを願っております。

編集後記：『JUDI 通信』も無事7号が出版できました。マンネリ化への批判もあるかもしれませんが、むしろ継続することの重要性を自覚し、マンネリを目指したいぐらいに考えております。ということで、今後もお付き合いください。今回は、大学の教員という立場から金沢市の「まちづくり」にコミットされ、また素晴らしい成果を多くもたらした川上先生にエッセイを書いていただきました。さらに、郡先生が手がけられた佐原の街並み再生。創らないで創る、という方法論は人口減少時代の日本において強く求められる手法であるかと存じます。手前味噌ですが、なかなか読み応えのなる内容になったかと思っております。(JUDI 国際委員長：服部圭郎)